

複数領域の情報がステレオタイプの形成に及ぼす影響

黒川光流

富山大学人文学部紀要第68号抜刷

2018年2月

複数領域の情報がステレオタイプの形成に及ぼす影響

黒川光流

問題

他者がどのような人物であるかを考えるとき、「体育会系」だから「上下関係に厳しい」であろう、「銀行員」だから「まじめ」であろう等というように、その人が所属している集団ないしは社会的カテゴリーに基づいて判断することがある。このように、ある社会的カテゴリーに対して人々が抱いている単純化、画一化された固定的イメージをステレオタイプという。実際、ある特定のカテゴリーに属する人々は、他のカテゴリーに属する人々と比較して、平均するとステレオタイプの内容に合致した特徴を有している傾向が強いこともあるだろう。しかし、同じ体育会系であっても、上下関係の厳しさのイメージが異なる部・サークル集団があるように、平均的には同程度の特徴を有している集団であっても、形成されるイメージ、すなわちステレオタイプが異なることもある。

サイズが異なる2つの集団があり、望ましい行動傾向を示すメンバーと望ましくない行動傾向を示すメンバーの比率が2つの集団で等しく、望ましくない行動傾向を示すメンバーの方が少ないとき、望ましくないメンバーの所属集団はサイズが小さい集団であると判断されやすいことが示されている (Hamilton & Gifford, 1976)。サイズが小さい集団のメンバーであることと、望ましくない行動とは、ともに数が少ないという共通点があるため、両者の間に実際にはない関係が認知されるのだと考えられている。すなわち、ある特徴を有しているメンバーの比率ないしは集団全体でのある特徴の平均は等しくとも、集団のサイズが異なれば、形成されるステレオタイプが異なることが推測される。

同一人物が行う所属集団のステレオタイプに一致する行動と一致しない行動とを同数観察しても、ステレオタイプと一致した行動が想起されやすいことが示されている (菅・唐沢, 2006)。また、所属集団のステレオタイプに一致しない行動傾向を示すメンバーは、例外として見なされやすいことも示されている (Mauer, Park, & Rothbart, 1995; Weber & Crocker, 1983)。さらに、ステレオタイプに基づいた判断を避けようとする抑制を試みると、抑制対象へのアクセシビリティが高まってしまい、かえってステレオタイプが活性化することも示されている (Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994)。このように、ステレオタイプが一旦形成されてしまうと、その内容とは一致しない情報が得られた場合であっても、変容しにくいことがうかがえる。

これらの研究では、特定の集団に対するステレオタイプの内容、すなわち、ある特徴を有す

る程度に関する集団全体の平均である「中心傾向」(佐久間・岡, 1999)の知覚をステレオタイプの指標としていた。しかし、その集団に属する人々がすべて、ステレオタイプの内容に合致した特徴を同等に有しているわけではない。対象となる集団に所属するメンバー同士の類似性を過大に認知し、多様性を過小に認知することも、ステレオタイプの重要な問題となる。すなわち、集団が平均を中心にどれくらいのばらつきを示すかに関する知覚であり、特定の集団に対するステレオタイプの強さを示す「変動性」(佐久間・岡, 1999)の知覚もステレオタイプの指標として重要である。簿記モデル(book keeping model)や回心モデル(conversion model)(Rothbart, 1981)、あるいはサブタイプ化モデル(subtyping model)(Mauer, Park, & Rothbart, 1995; Weber & Crocker, 1983)など、これまでのステレオタイプの変容に関する理論でも、ステレオタイプが変容するためには、集団内のばらつきを示す変動性を大きく知覚する必要があることが指摘されている。

従来は、まず中心傾向が知覚され、集団がどのようにばらついているかという変動性は、知覚された中心傾向に基づいて知覚されると考えられてきた。しかし、中心傾向の知覚と変動性の知覚との関係については、それとは異なる知見も得られている。佐久間・岡(1999)は架空の集団のテストの成績を刺激として用いて、成績の分布と集団サイズが中心傾向および変動性の知覚に及ぼす効果を検討した。成績の分布はテストの点数の分散によって、集団サイズはテストの点数情報の数によって操作された。その結果、平均点は同じであっても、成績の分布が小さいときと比較して、分布が大きいときには中心傾向が高く知覚されていた。すなわち、変動性のあり方が集団の平均の知覚に影響を及ぼしており、変動性の知覚が中心傾向の知覚を規定する可能性があることを示唆している。また、成績の分布が2つの集団で同様に小さいときには、サイズが小さい集団と比較して、サイズが大きい集団の変動性が小さく知覚されていた。成績の分布が小さいときには、個々のテストの点数と集団の平均とが近いために同化効果が生じ、実際以上に個々の点数が平均に近いと判断される。サイズが大きい集団には平均に近いと判断される情報の数が多く感じられるため、変動性が小さく知覚されたと考えられる。

このように、変動性を小さく知覚させる、すなわちステレオタイプを強める条件はいくつか実証されている。その一方で、ステレオタイプを弱めることが困難なことも示唆されている。佐久間・岡(1999)の研究では、成績の分布が大きいときには、個々のテストの点数の中には集団の平均から遠い情報もあり、それらの情報が対比効果によって実際以上に平均から乖離していると判断され、変動性は大きく知覚されると予想されていた。しかし、成績の分布が大きいとき、集団のサイズによって変動性の知覚に差異は見られなかった。対比効果が生じ、平均から乖離していると判断されたテストの点数の情報は、集団全体から切り離され、例外と見なすサブタイプ化(Weber & Crocker, 1983)等が生じ、変動性の知覚には反映されなかったのだと考えられる。また先述したように、ステレオタイプに一致した情報の方が想起されやすい(菅・

唐沢, 2006)という記憶の特徴が影響した可能性もある。

ただし、佐久間・岡(1999)の研究では、先に集団について考えてから個々の情報について判断するトップダウンの情報処理を行うときと比較して、個々の情報について考えてから集団全体について判断するボトムアップの情報処理を行うときには、変動性の知覚は成績の分布や集団サイズの影響を受けにくいことも示唆されている。ボトムアップの情報処理を行うことで、集団の多様性を正確に知覚できれば、ステレオタイプを弱めうることがうかがえる。ボトムアップの情報処理を行うためには、従来の研究のように、反ステレオタイプ情報を提示するだけでは十分ではなく、それ以外の手続きで情報に多様性をもたらす必要がある。そのためには、ステレオタイプから乖離した情報というよりも、むしろステレオタイプとは異なる領域の情報が重要な役割を果たすと考えられる。異なる領域の情報であれば、ステレオタイプに沿った期待、あるいはそれへの一致、不一致がないため、特定の情報の想起あるいは抑制が生じない。つまり、ステレオタイプとは直接関わりのない領域の多様な情報に接触することで集団の多様性が知覚され、結果としてステレオタイプに関わる領域についても変動性が高く知覚されると考えられる。

そこで本研究では、ステレオタイプに直接関わる領域だけでなく、それとは異なる領域の情報も提示することによって、形成されるステレオタイプにどのような差異が見られるのかを検討する。具体的には、活動性領域における集団の多様性に関する情報、すなわち成績の分布と情報の数が、知性領域におけるステレオタイプの形成に及ぼす効果を検討する。

方 法

実験参加者

大学生男性12名(平均年齢20.3歳, $SD=1.5$), 女性68名(平均年齢19.5歳, $SD=1.4$), 計80名(平均年齢19.6歳, $SD=1.4$)が実験に参加した。

実験計画

成績の分布2(小・大)×情報の数(少・多)の実験参加者間2要因計画であり、各条件に20名の実験参加者が無作為に配置された。

成績の分布 架空の小学校のあるクラスにおける算数の成績を知性領域の情報、体育の成績を活動性領域の情報として用いた。成績は100点満点での得点およびそれらをA-Eの5段階で評価したものを提示した。80-100点をA、60-79点をB、40-59点をC、20-39点をD、0-19点をEとした。算数の成績は、いずれの条件も15名分の情報が提示され、平均は40.0、 SD は20.2であった。体育の成績は、いずれの条件も平均が50.0であった。成績の分布は体育の成績の範

囲とSDで操作された。成績の分布小条件の範囲は25-75(B-D), SDは14.3, 大条件の範囲は15-85(A-E), SDは23.1であった。

情報の数 情報の数は実験参加者に提示される体育の成績の数で操作された。情報の数少条件では15名分, 多条件では45名分の情報が提示された。

従属変数

中心傾向および変動性の知覚 中心傾向および変動性の知覚は, 成績の分布推定課題を用いて測定した。これは0-10点, 11-20点, 21-30点, 31-40点, 41-50点, 51-60点, 61-70点, 71-80点, 81-90点, および91-100点, それぞれの点数の範囲に何%の児童がいたかを推定し, 合計が100になるように回答するものであった。Linville, Salovey, & Fisher(1986)を参考に, 中心傾向および変動性の知覚に関する指標を算出した。

手続き

実験参加者にはまず, 「小学校のあるクラスの成績を見て, そのクラスに対する効果的な授業方法について考えてもらう」というカバーストーリーを伝えた。そのクラスの算数の成績の一部として1ページからなる15名分の成績表が30秒間提示された。それを見た後に, 実験参加者は算数の授業方法に関する質問(フィラー項目)に回答した。次に, 条件ごとに操作された1ページからなる体育の成績表が30秒間提示された。それを見た後に, 実験参加者は体育の授業方法に関する質問(フィラー項目)に回答した。その後, 実験参加者は算数および体育それぞれについて成績の分布推定課題を行った。最後に実験者によるディブリーフィングが行われ, 実験は終了した。

結 果

中心傾向および変動性の知覚

条件毎に, 体育の成績の知覚された中心傾向および変動性の平均値を図1および図2に, 算数の成績の知覚された中心傾向および変動性の平均値を図3および図4に示した。各指標を従属変数として成績の分布2×情報の数2の2要因分散分析を行った。

体育の成績 中心傾向の知覚には, 成績の分布の主効果が有意であり($F_{(1, 76)}=9.28, p<.01$),

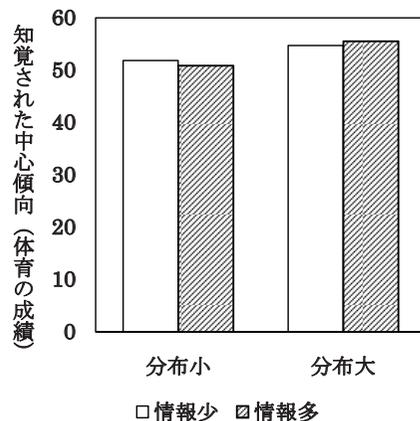


図1 体育の成績の知覚された中心傾向

大条件 ($M=55.1, SD=5.2$)の方が小条件 ($M=51.3, SD=5.2$)より中心傾向を有意に高く知覚していた。情報の数の主効果および交互作用は有意ではなかった ($F_s < 1, n.s.$)。変動性の知覚には、成績の分布の主効果が有意であり ($F_{(1, 76)}=107.26, p < .01$)、大条件 ($M=20.7, SD=3.0$)の方が小条件 ($M=14.8, SD=1.9$)より変動性を有意に高く知覚していた。また、有意な交互作用が認められた ($F_{(1, 76)}=4.06, p < .05$)。下位検定の結果、成績の分布小条件において、情報の数多条件 ($M=18.0, SD=2.4$)の方が少条件 ($M=18.5, SD=1.5$)より変動性を有意に低く知覚していた ($F_{(1, 76)}=8.44, p < .05$)。

算数の成績 中心傾向の知覚に関して、いずれの主効果および交互作用も有意ではなかった ($F_s < 1, n.s.$)。変動性の知覚に関して、成績の分布の主効果に有意傾向が認められ ($F_{(1, 76)}=3.97, p < .10$)、大条件 ($M=18.3, SD=2.0$)の方が小条件 ($M=18.0, SD=2.4$)より変動性を高く知覚する傾向があった。また、交互作用に有意傾向が認められた ($F_{(1, 76)}=3.46, p < .10$)。下位検定の結果、情報の数多条件において、成績の分布大条件 ($M=19.7, SD=2.2$)の方が小条件 ($M=18.0, SD=2.4$)より変動性を高く知覚する傾向があった ($F_{(1, 76)}=7.62, p < .10$)。

考 察

本研究の目的は、ステレオタイプの内容に直接関わる領域の情報だけでなく、それとは異なる領域の情報を提示することによって、形成されるステレオタイプにどのような差異が見られるのかを検討することであった。その際、ステ

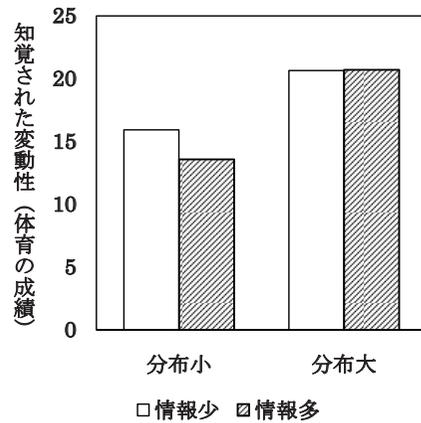


図2 体育の成績の知覚された変動性

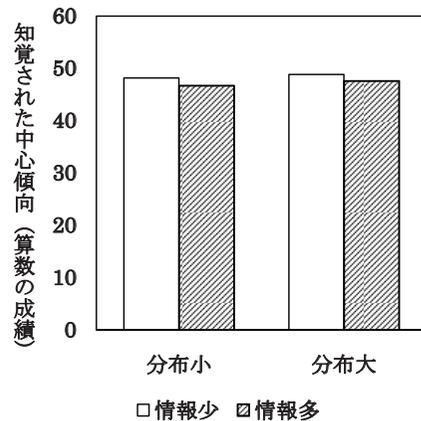


図3 算数の成績の知覚された中心傾向

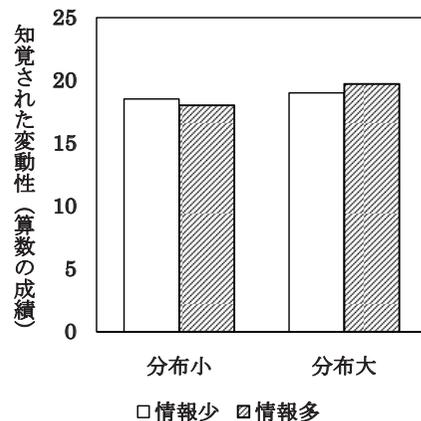


図4 算数の成績の知覚された変動性

レオタイプの内容に直接関わる領域として知性領域の、異なる領域として活動性領域の情報を
用い、それが示す特徴の分布と数が操作された。

体育の成績に関する情報の分布が大きいときには、それが小さいときと比較して、体育の成
績の中心傾向は高く知覚されていた。すなわち、活動性を示す情報が多様であるときには、集
団全体の活動性が高く感じられることが示唆された。また、体育の成績に関する情報の分布が
小さいときには、体育の成績の変動性が小さく知覚されていた。この傾向は、情報の数が多い
ときに顕著であった。すなわち、活動性に関する情報の数が多く、かつそれによって示される
特徴の範囲が狭いときには、その集団に属する人々の活動性についての類似性が高く知覚され
ることが示唆された。

これらは佐久間・岡(1999)が示した知見と同様の結果であった。活動性を示す情報の分布が
小さいことによって、個々の情報の類似性が高く認知される同化効果が生じ、変動性が小さく
知覚されたのだと考えられる。一方、活動性を示す情報の分布が大きいということは、そこに
極端な特徴を示す情報が含まれていることを意味している。極端な情報は目立ちやすく、記憶
に残りやすい(Hamilton & Gifford, 1976)。集団の特徴を認知する際にも、記憶されやすかった
極端な情報が利用されたため、中心傾向が高く知覚されたのだと考えられる。

算数の成績に関する中心傾向の知覚には、体育の成績の分布や情報の数による差異は見られ
なかった。すなわち、活動性に関する情報が多様であったり、数が多かったりしたとしても、
その集団の知性に関するステレオタイプの内容に差異はなく、異なる領域の情報の多様性や数
はステレオタイプの内容には影響を及ぼさないことが示唆された。しかし、体育の成績に関す
る情報の分布が大きいときには、小さいときと比較して、算数の成績に関する変動性は高く知
覚される傾向にあった。このような傾向は情報の数が多いときには見られたが、情報の数が少
ないときには見られなかった。すなわち、活動性に関する情報が十分にあり、かつその情報が
多様なときには、その集団に属する人々の知性に関する多様性が高く認知され、ステレオタイ
プが弱められた可能性がある。一方、活動性に関する情報であっても、情報の数が多く、それ
らが示す特徴の範囲が狭いときには、知性についてのステレオタイプを強めうることも示唆さ
れた。

対人記憶のネットワークモデル(Srull, Linchtenstein, & Rothbart, 1985)では、人物の情報は、
一定の観点から相互に関連付けられ記憶内に貯蔵されると考えられている。集団を認知する際
にも同様に、個々の情報は関連付けられて記憶されるのではないだろうか。しかし、活動性
に関する情報と知性に関する情報とは関連性が低いいため、知性についての印象を形成する際に活
動性に関する情報は想起されにくく、その多様性や数は知性についてのステレオタイプの内容
に影響しなかったのではないかと考えられる。また、佐久間・岡(1999)によって示された、同
一領域内の情報の多様性の低さおよび数の多さによって、その領域の変動性が低く認知された

のと同様の効果が、異なる領域の情報でも生じた可能性ある。

本研究の課題と効用

本研究では、ステレオタイプの内容に直接関わる領域として知性、それとは異なる領域として活動性を用いたが、集団の印象を判断する際、それらの領域同士がどの程度関連しているのかは確認していない。また、集団の特性を評価する次元には、知性や活動性以外に社会性などもあり、それらはポジティブな特徴を示すだけでなく、ネガティブな特徴を示す場合もある。さらに本研究では、活動性に関する情報が知性についてのステレオタイプに及ぼす影響を検討したが、知性に関する情報が活動性についてのステレオタイプに影響を及ぼす可能性もある。また、両方向の効果の強さは同じであるとは限らない。そのため、本研究で得られた知見が、集団の特徴を示すあらゆる次元に当てはまるか否かは明確ではない。

また、本研究ではステレオタイプの内容の指標として中心傾向の知覚を、ステレオタイプの強さを示す指標として変動性の知覚を用いた。そのため、その集団に属する人々はみんな知的である、あるいは活動的であるなどのような、画一化、単純化された固定的イメージを抱いていたかどうかは直接的には検討されていない。集団のイメージおよびその強さを直接測定し、中心傾向や変動性の知覚と対応させる研究が必要であろう。

さらに本研究で示された、活動性に関する情報の多様性や数が知性についてのステレオタイプの強さに及ぼす効果は、領域が異なる情報を扱っているため、同化効果や対比効果などの知覚的バイアスだけで解釈することは難しい。どのような認知的メカニズムによって、ある領域の多様性の認知が異なる領域の多様性の認知に影響を及ぼすのか、さらに検討していく必要がある。

以上のように、いくつかの課題はあるものの、本研究の結果から、ステレオタイプとは直接関わりのない領域の情報であっても、その多様性が低いときにはステレオタイプを強め、多様性が高いときにはステレオタイプを弱めうることが示唆された。特に、十分な量の情報があるときには、その効果が強く見られることも示唆された。

引用文献

- Hamilton, D. L. & Gifford, R. K. (1976). Illusory correlation in interpersonal perception: a cognitive basis of stereotypic judgement. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 392-407.
- Linville, P. W., Salovey, P., & Fisher, G. W. (1986). Stereotyping and perceived distributions of social characteristics: An application to ingroup-outgroup perception. In J. Dovidio & S. L. Gaertner(Eds.) *Prejudice, Discrimination, and racism*. Academic Press. Pp. 165-208.

- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994). Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 808-817.
- Mauer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **69**, 812-824.
- Rothbart, M. (1981). Memory Processes and Social Beliefs. In Hamilton, D. (Ed.), *Cognitive processes in stereotyping and intergroup behavior*. Lawrence Erlbaum Associates, Inc., 145-181.
- 佐久間勲・岡隆 (1999). 知覚的バイアスとステレオタイプ形成—同化効果と対比効果による変動性の知覚の変化— 実験社会心理学研究, **39**, 16-29.
- 白井泰子 (1979). ステレオタイプの判断の認知的基礎—誤った関連づけの認知— 実験社会心理学研究, **19**, 61-69.
- 菅さやか・唐沢稜 (2006). 人物属性表現にみられる社会的ステレオタイプの影響 社会心理学研究, **22**, 180-188.
- Srull, T. K., Linchtenstein, M., & Rothbart, M. (1985). Associative storage and retrieval processes in person memory. *Journal of Experimental Psychology: Learning, memory, and cognition*, **11**, 316-345.
- Weber, R. & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotype. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 961-977.